別紙様式第２号

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏　　名　林　晋太郎
学　位　の　種　類　博士（学術）
学　位　記　番　号　環情博甲第 369 号
学位授与年月日　平成 27 年 9 月 25 日
学位授与の根拠　学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 4 条第 1 項及び横浜国立大学学位規則第 5 条第 1 項
学　府・専　攻　名　環境情報学府　情報メディア環境学専攻
学位論文題目　Head Movement in an Agglutinative SOV Language
論文審査委員　主査　横浜国立大学　教授　森　辰則
横浜国立大学　教授　田村　直良
横浜国立大学　准教授　マーティン　ロジャー
横浜国立大学　准教授　藤井　友比呂
国立国語研究所　特任助教　船越　健志

論文及び審査結果の要旨

主要部移動とは，（助）動詞等が構造的に上位の終端節点へ移動する現象である．SVO 語順を持ち右枝分かれの木構造を持つ英語では，主要部移動の関与が語順の変化から明らかである．例えば *John can swim* から助動詞 *can* を「左へ」移動させ，*Can John swim?*を生成する操作がある．一方 SOV 言語であり左枝分かれである日本語においては，たとえ主要部移動が起こっていても表層語順に生じない．なぜなら動詞が構造的に上位にある終端節点へ移動すると「右へ」移動することになるからである．動詞がいくら右へ移動しても語順は変わらない．（「泳げるか」において「泳げる」が「か」の位置に動いたとしても，語順からは判別がつかない．）

本学位論文は，表面的な音声形式に影響を及ぼさないものの，日本語の文法に主要部移動は存在すると主張する．第１章では，主要部移動一般に関する背景知識を提示し，日本語の先行研究が吟味されている．第２章では，前半でテ節補文（「わたしは太郎にピザを焼いてもらった」）を例とし，主要部移動分析の正否を議論するさいの境界条件となる諸現象が提示され特徴づけられた．具体的には，移動現象，名詞化現象，削除現象のデータが提示された．その後，動詞+テが主節動詞まで移動するという派生を提案し（「焼いて」の部分が「もらった」の位置まで移動し，「焼いて+もらった」を生じる），その提案が３現象と矛盾しないことが示された．そののち本研究の代案となる分析をいくつか議論し，本研究が推す移動分析が他の代案よりも経験的に優位であることが示された．第３章では，「洗う」のような和語動詞と「洗濯する」のようなスルを伴う動名詞という２種類の述語が削除現象において異なる振る舞いを見せることを観察している．この差異は，和語動詞が主要部移動により生成された位置よりも高い位置に移動する一方で，動名詞は主要部移動の適用を受けないと分析することで正しく捉えることができる．主要部移動操作が確かに存在するという本論文の主張を，動詞が移動しないケースが存在し提案が予測する通りに振る舞うことを確認することで強めている．第４章は結語であり，本論文の考察の意味合いをこれまでの研究史の中にどう位置づけるかが議論され，今後の課題が定式化されている．

以上のように本研究は，SOV 言語に主要部移動があるかという問いに対し，経験的な境界条件を明確にした上で「ある」という解答を，新しい言語事実を含む，盤石な経験的基盤に基づいて提出したものである．研究成果の公表は，査読付き正論文１編，正論文相当の査読付き国際会議論文１編，および国際会議における口答発表などで公表され，高い評価を受けている．以上から，本論文は博士（学術）の学位論文として十分な価値を有するものと審査委員一同全員一致して認めるものである．

注　論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。